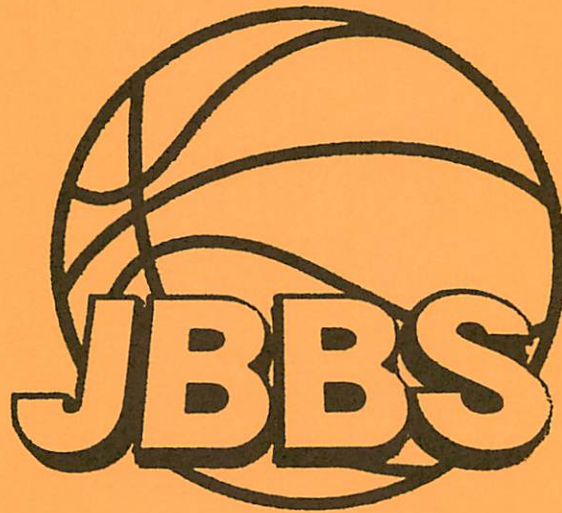


抜粋版

バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No:31



2006年10月

日本バスケットボール振興会

REUSE を考える

[環境の総合情報商社]

“地球にやさしく” どこかで見たような聞いたような言葉。

あなたはリサイクルに関心を持っていますか？

“地球環境をこれ以上汚したくない”これが私たちの願いであるとともに、人類に課せられた大きな課題です。

当社は携帯電話やパソコンなど、鉄を除いた金属（レアメタル）の回収、再生（リサイクル）を主な業務にしている会社です。

日本のバスケットボールの振興、発展を応援します。

リユース・ビズテック 株式会社

〒333-0842

埼玉県川口市前川2-33-1

TEL 048-263-7023

FAX 048-269-8009

代表取締役 永野 鉄洋

目 次

○ 2006 F I B A世界選手権大会閉幕	3
○ 男子日本代表ヘッドコーチに鈴木氏	10
○ 特集	
客室乗務員がんばる	広報部会 12
日本航空 JAL RABBITS	
○ ママさん全国大会に学ぶもの	広報部会 16
○ 会員だより	
貧乏時代のバスケット	大川 裕 19
懐かしい思い出	柳谷 義夫 21
50年を振り返って	安永 利文 23
新参者の繰言	佐々木正隆 25
WIリーグ「エバラヴィッキース」	坂根 茂 27
地域社会貢献の実践について	
○ JBL 開幕	30
○ WJBL 開幕	35
○ 臨時総会報告(概要)	広報部会 39
法人化申請へ向けての資料他	
○ 訃 報	
関 四郎先生とミニバスケットボール	廣見 正剛 58
畏友 浜 美郎君のこと	大塚 周一 59
浜 美郎さんを偲ぶ	松木 則好 60
三木 均さんを偲ぶ	黒川 敏雄 62
○ プラザ こぼればなし	63

2006 FIBA世界選手権大会閉幕

—— 優勝はスペイン ——

8月19日から札幌市、仙台市、浜松市、広島市で始まった2006 FIBA世界選手権大会は、9月3日さいたまアリーナで行われたギリシャ対スペインの決勝戦で幕を閉じた。

記念すべきこの大会、開幕まではいろいろと取り沙汰されたが、いざ開幕してみるとその盛況振りが際立った。日本協会によれば観客数は予選ラウンド各開催地合計で約10万人、決勝ラウンドのさいたまアリーナへは実に12万人を超える観客が集まったという。



さいたまアリーナへ続々と集まる観客

日本ではマイナーの部類に入るバスケットボールだが、世界の人気はメジャーの名の通りものすごい人気だ。それでも観客の大部分は日本人であったし、各国のサポーターによる応援もすさまじかった。

残念ながら日本代表は、予選ラウンド敗退という結果に終わってしまったが、世界のバスケットを目のあたりにして、日本におけるバスケットボールがもっと発展すれば、メジャースポーツになり得るといふヒントを与えられたような気がする。

世界中のバスケットファンから注目される中、この大会が大きな混乱もなく無事閉幕したことを共に喜びたい。

<決勝戦 ギリシャ対スペイン>

決勝戦は準決勝で強豪アメリカを破ったギリシャと、前回オリンピック優勝国アルゼンチンを撃破したスペインの対戦となり、接戦が予想されたが結果はスペインの圧勝となった。

スペイン	70	}	47	ギリシャ
		{		
		18	—	12
		25	—	11
		11	—	11
		16	—	13

この試合スペインは大黒柱のセンター、パウ・ガソル (214cm) が準決勝のアルゼンチン戦で左足を骨折して欠場となり、ゲーム前はギリシャ有利かと思われたが、パウ・ガソルの欠場が逆に強固なチームワークを生み出し、ナパーロ、ヒメネス、ガルバホサ、パウの弟マルク・ガソルらが奮闘し、一度のリードも許さずに快勝した。大会のMVPにはパウ・ガソルが選出された。

スペインはパウ・ガソルの代わりにスタートではレジェス、途中からはパウの弟マルク・ガソルなどをインサイドに起用したが、いずれも執念のディフェンスでギリシャのセンタースコーツァニーティスをたったの2得点に抑え込んだ。

オフェンスではポイントガード・カルデロンとガード・ナパーロの緻密で的確なリードが

さえ、ギリシャにつけいる隙を与えなかった。ギリシャが対等に戦えたのは第1ピリオドの中間だけ。

それにしてもスペインガード陣のオフェンスは素晴らしかった。組織プレーを組み立ててインサイドに空きを作りイージーシュートを打たせる。相手がインサイドを押さえにかかると相当遠い距離からでも3Pを決める。主力選手の3P平均成功率は低くて40%、高い方では50%を超える。

今回の世界選手権で、選手個々の能力や技術はアメリカチームが優っていたと思うが、バスケットボールは優秀な選手を集めてもチームプレーには抗しきれないことが証明された形。アップテンポな試合運び、緻密なプレー、正確なシュートなどヨーロッパスタイルのバスケットが花開き、レベルも一段と高まった印象が強い。

<日本代表の戦い>

最低でも決勝ラウンドへ進むことが期待された日本だったが、予選ラウンドで勝ったのはパナマ戦だけで、Bグループ6チーム中5位に終わり、各グループ4チームだった決勝ラウンド進出の枠には入れなかった。特にパナマに勝利した後のニュージーランド戦は、前半を終わった時点で18点のリードがあったにも拘わらず、後半の最後に逆転されて惜敗、残念の一言と同時に悔しさがこみ上げる。以下日本代表のゲームを振り返ってみた。

日本対ドイツ

ドイツはヨーロッパ選手権2位で、NBAトッププレイヤーのダーク・ノビッキーがいる強力な相手だったが、点数で見れば70対81の11点差であり、よく健闘したと言ってよい。

第1ピリオド開始早々はほぼ互角に戦ったが、やはりノビッキーが活躍し始めるとあっという間に点差が開き20対34で終わる。ノビッキーはこのピリオド13得点を上げる。

第2ピリオド日本のディフェンスが功を奏しドイツのシュートミスを誘う。日本は速攻や五十嵐の3Pシュートなどで10点差まで詰め寄ったが、終了間際相手に3Pを決められて結局37対50の13点差となってしまった。

後半に入るとドイツのオフェンスがよく機能して、5分で19点差をつけられてしまう。しかしタイムアウト後の日本は、ここから驚異的な粘りを発揮、櫻井の速攻、竹内(公)のジャンプシュート、折茂の3Pなどで追い上げ、残り2分すぎには竹内(公)のダンクまで飛び出して、56対64と8点差まで追いつけた。

第4ピリオド日本は折茂のジャンプシュートなどで抗するが、ドイツは休んでいたノビッキーを再び投入、高さを生かしたゴール下のプレーには日本もお手上げ状態。日本はディフェンスで頑張るが点差を詰めることができず、最後は11点差で敗れた。

敗れはしたものの強豪ドイツに真っ向から挑み、そこそこ対抗できたことは次のゲームにつながる好結果だった。

日本対アンゴラ

予選ラウンド通過のためには負けられない一戦、日本は第1ピリオドの途中で最大11点のリードを奪ったが、第2ピリオドになるとアンゴラの厳しいディフェンスに後退し、結局62対87の大差で敗れてしまった。

第1ピリオド日本は折茂の3Pで先行し、厳しいディフェンスでアンゴラを抑えオフェンスでも柏木の果敢なドライブインなどで加点し、21対16と5点リードで終わる。

第2ピリオド、アンゴラはディフェンスの当たりを強め、オフェンスでは日本のお株を奪

うように早いパス回しから3Pを成功させる。このピリオドでアンゴラは7本の3Pを沈め、巧みなスクリーンプレーからも得点を重ねる。日本は竹内(公)がダンクで頑張ったものの逆転を許し、前半終了時には32対44と12点の差をつけられた。

第3ピリオド、日本は五十嵐、柏木の2ガードで機動力を生かそうとするがアンゴラのディフェンスに押されて攻めあぐむ。体力と上背に勝るアンゴラはオフェンスリバウンドからの得点も重ね、点差は開くばかりとなった。終盤には連続して3Pを決められて43対66の23点差でこのピリオドを終わる。

なんとか立て直したい日本だったが、第4ピリオドに入ると体力的に消耗し得意の3Pシュートも単発的に入るだけとなった。アンゴラはあいも変わらず早いパスから3Pを打っては成功させたり、速攻を決めたりとすごい勢い。終わってみれば62対87の25点差で日本が敗れたが、アンゴラはアフリカ大陸で優勝した国だけあって、プレーは少々粗いが体力的には計り知れない力を持っている。ちなみにこのゲームのリバウンドは、アンゴラが50本と日本の28本を大きく上回り、3Pも24本中12本を決める高確率だった。これで日本は予選ラウンド通過にあとがなくなった。

日本対パナマ

この試合に負けるとほぼ予選ラウンド敗退が決まってしまう日本は、序盤こそ相手にリードを許したが、ディフェンスを厳しく、ねばり強く戦って逆転、3Pや速攻など本来のプレーを随所に発揮し、パナマを振り切った。決勝ラウンドに向かって片目が開いた感じで、これからが期待される。

第1ピリオド、日本はノーマークの3Pを連続してはずすなどして、固さが目立つスタートとなった。これに対してパナマはインサイドプレーで着々と得点し、22対14と8点差をつけられる。

第2ピリオド、日本は櫻井の起用が当たりスティールからのジャンプシュートや、ドライブインなど果敢な攻撃が功を奏し、開始2分強で20対24の4点差に詰めた。このせいもあってか試合の流れが一挙に日本へ傾いた感じで、全員が集中したプレーでパナマを圧倒、終了間際に竹内(譲)の3Pもあって36対33と逆転して前半を終わる。

第3ピリオドに入っても集中力の切れない日本は厳しいディフェンスでパナマを浮き足立たせる。日本のシューター折茂の連続3Pで引き離すと五十嵐、竹内(譲)の連続3Pでとどめを刺す形となり、57対43とリードを14点に広げ、盛り上がった状態で第4ピリオドへ。

第4ピリオドに入っても日本の足は止まらなかった。五十嵐や柏木がスティールからの速攻でさらに引き離す。パナマは集中力も切れた様子でシュートも単発で決まるだけとなり、残り6分には竹内(譲)のダンクで68対52の16点差。この後一進一退となるが出場した選手全員が得点を重ね、終了時には78対61の大差で快勝した。

日本対ニュージーランド

お互いに1勝3敗同志の対戦となり、よほどのことが無い限り、この試合に勝ったチームに最後に残った決勝ラウンド進出のポジションが転がり込む形となった。日本は序盤から積極的に攻めるとともにディフェンスの当たりも強めて、前半終了時には38対20と18点のリードを奪い、このペースが続けば勝利間違いなしの感だったが、はたして。

第1ピリオド、ニュージーランドがゾーンプレスやマンツーマンで多彩なディフェンスを見せる。日本は落ち着いてこのディフェンスを攻め、五十嵐の3P、折茂のジャンプシュートで加点、ディフェンスでは古田がポストで身体を張って相手のインサイド陣を抑えるとい

った好展開。

終了間際には櫻井が正面から相手ディフェンスを突破して、シュートを成功させると同時にブザーとなり26対13とリードした。

第2ピリオドに入っても日本はテンポのいいオフェンスで、網野や川村の3P、竹内(謙)のゴール下シュートで相手を突き放す。ディフェンスでもニュージーランドをわずか7点に抑える健闘で、前半は38対20という得点差で折り返す。

第3ピリオドに入ると情勢は一変した。ニュージーランドはインサイドを狙ってがむしやらかなオフェンスを仕掛ける。日本は最初に川村の3Pが決まっただけで、その後は6分間ノーゴール。リバウンドも相手に奪われ始め、残り4分には41対36の5点差に詰め寄られる。その後折茂の3Pなどで息を吹き返し、終了近くのフリースローも決まって48対36の12点差で最終ピリオドへ。

第4ピリオド、ニュージーランドは激しいディフェンスからボールを奪うと、キャメロンらの連続4本の3Pで残り5分には52対48と肉薄する。

日本は何とか逃げ切ろうとするが、これがかえってプレーの消極性を呼びオフェンスの流れが完全にニュージーランドへ傾いた。こうなると追いかける方が勢いづくもので、残り1分24秒で再びキャメロンの3Pが決まって、ついに57対57の同点に追いつかれる。

ここで踏ん張りたい日本だったが、体力消耗によって体制が乱れるとともに、オフェンスが全く機能しなくなり、シュートまで持っていけない状態で相手ボールとなる。残り31秒にニュージーランドのペニーが打った3Pが成功して57対60の劣性となる。その後の攻めで日本は3Pシュートを仕掛けるが、これがはずれて万事休す。そのまま相手に逃げ切られて57対60の3点差で苦渋を飲まされた。

日本対スペイン

日本はこの試合に負ければ1勝5敗で決勝ラウンドへの道はなくなるが、ヨーロッパで常に上位を争うスペインには全く歯が立たずに完敗。結果として予選ラウンド5位となり広島で姿を消すこととなった。

第1ピリオド、日本はこれまでとスタートメンバーを変え、山田、折茂、竹内(公)、網野、節政でスタート。いいゲームメイクで入り、開始4分までは一進一退だった。しかしスペインは、ここからパウ・ガソルやナパーロらによる怒濤のオフェンスで、14対27とリードして終わる。日本はこれらのオフェンスに対してディフェンスが機能せず、いいようにスペインに得点されてしまった。

第2ピリオドに入るとスペインは次々とメンバーを変え、元気なことこの上なく容赦ない攻めが続く。早いパス回し、3P、ジャンプシュートなどで得点するが、日本は抗しきれず前半終了時には27対47の20点差をつけられる。

第3ピリオドに入るとスペインは再びスタートメンバーがフル回転、パウ・ガソル、ナパーロ、ガルバホサらが連続ゴールを決める。日本はシュートチャンスはあるものの、相手ディフェンスに阻まれて、まともにシュートを打つことが出来ず、シュート不成功のリバウンドは殆どスペインへ。この間6分間、日本のノーゴールに対してスペインは怒濤の攻め、結局このピリオドでは日本はスペインのゾーンを攻められず得点は9点だけで終わり、36対78のスペイン大量リードで終わる。

第4ピリオドになってもスペインの勢いは止まらず、日本は完全に翻弄された。高さのあるスペインのゾーンを崩すことができず、結局55対104で完敗した。

最終的に2006 FIBA世界選手権はスペインの優勝で幕を閉じたが、特筆すべきはヨーロッパ勢の活躍だろう。決勝ラウンド進出の16チーム中9チームがヨーロッパの国々であったし、アジアでは中国だけしか決勝ラウンドに進出できなかった。



巨大な大会看板の前で写真を撮る子供たち

今回好成績だったヨーロッパ勢は派手なプレーをすることなく、バスケットボールがチーム競技だということを徹底してプレーしている。大会前はアメリカやアルゼンチンの前評判が高かったが、ヨーロッパ勢の組織プレーに阻まれた形となった。

早い展開の組織プレーがものを言うバスケットとなれば、日本だって希望が持てないわけではない。得意とする迅速なプレーと3Pを含めたシュート確率を上げれば、体力的に劣る日本人でも世界に対等できるバスケットが可能なのではないだろうか。

<日本代表のポイント>

この大会出場24チームのデータを後述するが、1試合平均の得点を見る限り日本は最下位のカタールについて下から2番目の64.4で、平均の77.15にはるかに及ばない。

相手のディフェンスによっても異なると思うが、シュート確率を上げることもこれから大きな課題のひとつになるだろう。予選ラウンドにおけるシュート確率は、3Pが31.6% 2Pが45.6%となっており、決勝ラウンドに進んだチームと比べると雲泥の差。

一方リバウンドでは、平均獲得本数24.6で最下位だった。シュートブロックについても下から2番目の成績で、身体能力の差があるとはいえ大型選手の奮起が望まれる。

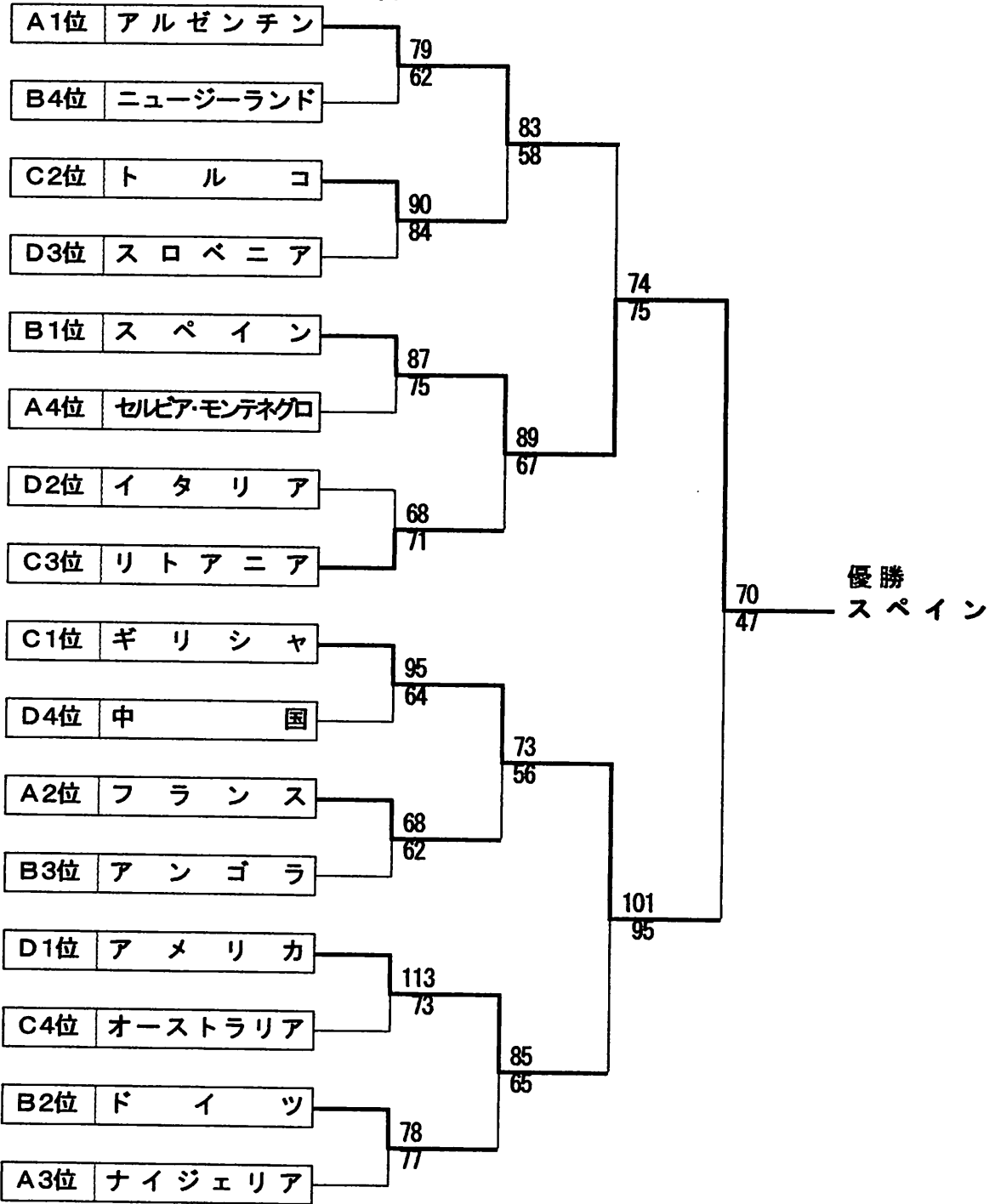
自国開催の世界選手権大会は、これから日本のバスケット界が努力しなくてはならない多くの課題を与えてくれた。

オリンピック出場への条件が以前と変わった現在、日本はなんとしてもアジアでトップの地位を築く必要があるだろう。

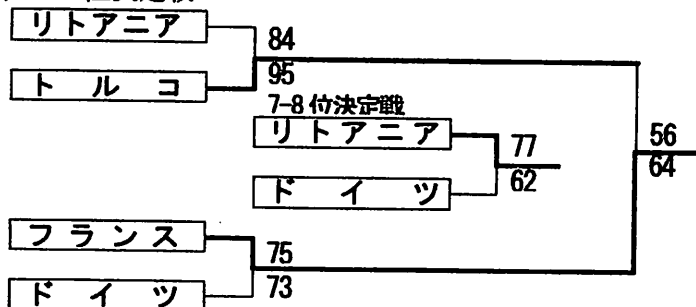
[オリンピック出場条件]

出場できるチーム数は全部で12、各大陸に与えられた代表チーム数(アジアは1)と開催国、世界選手権優勝国チーム、残りの枠は改めて世界予選を行って決定する。

決勝ラウンドトーナメント表



5位—8位決定戦



大会最終順位(上位8位迄)	
1位	スペイン
2位	ギリシャ
3位	アメリカ
4位	アルゼンチン
5位	フランス
6位	トルコ
7位	リトアニア
8位	ドイツ

出場チームランキングとデータ

順位	チーム	勝/負	チームスタッツ				
			得点	リバウンド	アシスト	ブロック	スティール
1位	スペイン	9/0	88.6	35.1	14.3	2.9	9.8
2位	ギリシャ	8/1	80.0	27	12.2	2.4	10.1
3位	アメリカ	8/1	103.6	36.3	18.8	4.9	10.8
4位	アルゼンチン	7/2	86.8	37.8	18.1	2.1	7.1
5位	フランス	6/3	68.4	38.3	10.8	3.7	7.2
6位	トルコ	6/3	74.3	29.7	11.9	3.4	7.3
7位	リトアニア	5/4	79.1	36.8	15.3	2.6	9
8位	ドイツ	5/4	77.7	34.1	12.7	2	5
9位	アンゴラ	3/3	85.5	35.5	14.3	2.5	8.3
9位	オーストラリア	2/4	73.8	30.7	15.2	1.5	8.7
9位	イタリア	4/2	75.7	31.8	14.7	2	7.5
9位	ナイジェリア	2/4	74.7	34.8	10	2.3	9
9位	ニュージーランド	2/4	67.8	28.5	14.3	1	8.5
9位	中国	2/4	81.3	31.7	13.3	4.3	3
9位	セルビア・モンテネグロ	2/4	80.7	33	12.8	5	7.3
9位	スロベニア	2/4	86.3	35.5	14.8	2.7	7.3
17位	ブラジル	1/4	79.8	28.8	14	2	10.2
17位	日本	1/4	64.4	24.6	10.4	1.4	7
17位	レバノン	2/3	71.4	31.6	9.2	2.6	6.6
17位	プエルトリコ	2/3	86.4	30.2	12.2	2	6.4
21位	パナマ	0/5	65.2	33.8	8.4	2	6.6
21位	カタール	0/5	62.0	29.8	13	1.6	7.8
21位	セネガル	0/5	71.0	34	12.2	2.6	7.8
21位	ベネズエラ	1/4	67.2	37	11	3	6.6

※スタッツデータは1試合平均の数字です

[本大会ベスト5]

最終日の表彰式で発表されたこの大会のベスト5は次の通り。ベスト5は出場全選手の中からメディアの投票により決定され、MVPは選ばれたベスト5のうち最も得票数の多かった選手となる。

パウ・ガソル	(スペイン	NO4	CF)	MVP
テオドロス・パパーカス	(ギリシャ	NO4	PG)	
エマニュエル・ジノビリ	(アルゼンチン	NO5	SG)	
カーメロ・アンソニー	(USA	NO15	SF)	
ホルヘ・ガルバホサ	(スペイン	NO15	PF)	

男子日本代表ヘッドコーチに鈴木氏

[広報部]

世界選手権で惜しくも決勝ラウンド出場を逃がした日本代表、このたび次期ヘッドコーチにアイシンの鈴木貴美一氏が就任し、9月13日記者会見が開かれ抱負が述べられた。

同時に本年11月から12月にかけてカタールのドーハで開催される、第15回アジア競技大会に臨む男子日本代表チームも発表された。

鈴木氏は、このアジア競技大会に続いて、平成19年に徳島で開催される北京オリンピック予選となるアジア選手権大会に向けても日本代表チームの指揮をとる予定。



鈴木貴美一氏

昭和34年(1959)生まれ46歳、東京都出身、能代工業高校から法政大学卒、日本鉱業(現 JOMO)に入社しフォワードとして活躍、日本代表選手として国際ゲームにも多数出場、昭和63年(1988)引退後、秋田経済法科大学コーチを経て平成7年(1995)からJBLアイシンのヘッドコーチ、アイシンは鈴木氏就任後、スーパーリーグ優勝2回、全日本総合(天皇杯)4年連続優勝。

鈴木貴美一氏ヘッドコーチ就任の抱負

このたび日本代表チームのヘッドコーチ就任要請を受け、責任の重大さを感じると共に身の引き締まる思いです。

先日、世界選手権大会が日本で開催されましたが、私たちバスケットボールに携わる者としては非常にいい勉強ができたことと同時に、選手諸君にとっても良い経験になったと思います。今回の世界選手権では前評判の高かったアメリカが、準決勝でギリシャに敗れて優勝を逃しました。選手個々の能力はアメリカが抜きん出ているのに、チームプレイに徹したヨーロッパのチームに勝てなかったということは、バスケットボールがチームプレイ如何によって大きく変わるという証拠だと思っています。

国際的にみて日本人は体格的に劣るという厳しい状況にありますが、バスケットボールを志望する若い世代の灯火を消さないためにも、全力でこの仕事に打ち込む覚悟です。艱難辛苦はあると思いますが、まずアジアで優勝することを目標として頑張ります。

現在アジア各国では日本のマッカーサー選手のような帰化選手が増えているのと同時に、運動能力の高い選手も多くなっていますので、一生懸命やれば何とかかなるというわけにはいかない状況にあります。

このような中で勝つためには、戦力分析やスカウティングも重要ですし、いろいろな面での工夫も必要です。リバウンドやルーズボールといった相手と競う場面では精神力も必要ですが、オフェンスではある程度考えなければいいプレイは生まれません。確率の高いシュートを打てるシュートセレクションの工夫とか、日本人特有の綿密さを生かしたプレイなどが要求されます。オフェンスにおける無理なプレイから出るミスをできるだけ無くすることも重要な要素です。

日本人の体格とパワーからいって、ただがむしゃらに頑張るだけではなく、選手が最高のパフォーマンスでプレイできるように仕向けることが、私の任務と思っています。

アジア競技大会

第15回アジア競技大会は、11月30日から12月15日までカタールで開催されるが、この大会へ向けての強化合宿はスーパーリーグの日程もあって、下記2回の短期間のみとなっている。

第1次強化合宿 9月18日～19日

第2次強化合宿 11月21日～26日予定

日本代表チームメンバー表

◆スタッフ（一部）

	氏名	所属
スーパーバイザー	杉浦 良昭	日本バスケットボール協会男子強化部長
ヘッドコーチ	鈴木 貴美一	アイシン
アシスタントコーチ	田中 輝明	東芝
マネージャー	宮崎 祐二	アイシン

◆選手

氏名	P ポジション	身長 cm	体重 kg	年齢	所属
マッカーサー・エリック	C	197	105	38	アイシン
折茂 武彦	SG	190	77	36	トヨタ自動車
佐古 賢一	PG	179	80	36	アイシン
大野 篤史	F	197	90	29	三菱電機
渡邊 拓馬	SG	188	83	27	トヨタ自動車
青野 文彦	C	210	118	27	松下電器
伊藤 俊亮	C	202	98	27	東芝
網野 友雄	SG/F	196	88	25	アイシン
柏木 真介	PG	183	78	24	アイシン
桜井 良太	SG	194	75	23	トヨタ自動車
竹内 公輔	PF	205	90	21	慶應義塾大学
竹内 譲次	F/PF	205	93	21	東海大学
平均Average		195.5	89.6	27.8	

ポジション：PG-ポイントガード、SG-シューティングガード、F-フォワード、PF-パワーフォワード、C-センター

年齢と所属は2006年9月現在

鈴木ヘッドコーチのコメント

アジア競技大会へ向けて時間がないことからよりベターな推薦をし、特にポイントガードについては、自分の身近にいる選手を推薦させていただいた。また、ベテラン選手と若手とが同じ練習メニュー、同じゲーム出場時間としたらベテラン選手は無理なので、それなりに考えた起用を行っていく方針。



記者会見する左から杉浦、石川、鈴木の各氏

特集

客室乗務員がんばる

日本航空 JAL RABBITS

担当：広報部会

はじめに

4月発行の「バスケットボールプラザ」29号でも報告の通り、第7回Wリーグファイナルは文字通り死闘の連続だったが、わずかに経験に優るシャンソンが第5戦を制して優勝した。準優勝の日本航空は今シーズンこそと、練習とチーム作りに厳しい日程をこなしている。

一昔前までスチュワーデスと云えば女性たちの憧れる職業、現在は男性も同様に乗務するので客室乗務員かキャビンアテンダントと呼ぶのだそうだが、希望すれば誰でも就職できる職業ではなく、長期に及ぶ厳しい訓練の上、資格試験に合格しなければ就くことができない特殊業務である。

現在、日本航空チームにはマネージャーを含めて6名の客室乗務員が在籍するが、ゲームは勿論のこと、トレーニングや練習でもチームの先頭に立ってがんばっている。

そんな彼女たちの日常を知るべく、羽田空港内にある体育館を訪ね、練習の合間に苦労話を聞いてみた。

早くインタビューに応じていただいた方は、主将の柳本聡子選手、センター矢代直美選手、谷美和マネージャーの3人で、いずれも客室乗務員の資格と航空保安要員の役割をになっているが、彼女たちが入社した頃は選手全員が客室乗務員養成訓練の対象者になっていたという。

柳本聡子選手



昭和53年(1978)大阪府出身28歳、樟蔭東高校から樟蔭東女子短期大学卒、170cm、64kg、フォワードポジション。
風呂が好きで趣味もいろいろな入浴剤を買い集めることとか。
今年度からチームキャプテン。

矢代直美選手



昭和52年(1977)茨城県出身28歳、日立女子高(現明秀日立高校)から日本体育大学卒、182cm、72kg、センターポジション。
2002年世界選手権、2004年アテネオリンピックに日本代表として出場。
カレーが好きで旅行が趣味。

谷美和マネージャー



昭和50年(1975)三重県出身31歳、津高校から日本体育大学卒、
学生時代は学連の委員長を務めていた。
日本航空入社後すぐにマネージャー。
なかなかの美人。

WJBLで優勝を逃した昨シーズンは

最後までがんばったが今一步及ばず2位に甘んじた結果について次のように感想を話してくれた。

「リードしているとき守りに入ったのではないかと言われますが、あくまでチャレンジ精神で臨みましたので、そういう意識はありませんでした。敗けた要因はきわめて小さく、ちょっとしたミスの積み重ねがいけなかったのだと思います。得失点から見てもその差はわずかで、ゲーム中、細かいところのミスを修正できなかったことが勝てなかった要因ではないでしょうか」という彼女たち。

今シーズンは

ポイントガードだった蕨内夏美選手をはじめレギュラークラスが3名引退したので、シーズン当初はチームとして何からやったらいいのかわからない状態だったようだが、チーム全員がそういう状況を認識して前向きに取り組み、昨年以上のチームを作るべく意識し努力してきた結果、最近ではチームとしても、林(イム)ヘッドコーチのもとメンバーが入れ替わったという感覚はなくなっているという。

蕨内夏美選手が抜けたPGには、1対1の能力に定評がある伊佐樹里選手を起用、経験という点では、まだ蕨内選手にとどかないが、技術的には個性的なオフェンス能力も持っているようで、いい面ができれば蕨内選手とはひと味違ったポイントガードが期待できる。チーム全員が林ヘッドコーチと一体になって着々と新しいチーム作りが進んでいるようだ。

日常の練習は、雨が降っていなければ朝5時30分に起床して、河原でのランニングに始まり、午前、午後の練習を行なう。特に合宿のときは、多いときなど1日の練習回数が4回に及び、延べ10時間以上の練習もこなす。シーズンインまで厳しい練習が続くが、目指すのは「優勝」の二文字のみ。

聞けば林ヘッドコーチが就任してから、チームとしての考え方やバスケットに対する取り組み方、選手としてのあり方や練習時間など、いろいろな面で意識改革が進められた。それまで選手個々の技術だけで戦ってきた弱いチームが、Wリーグにおいて上位を争えるしっかりとしたチームに変わったという。

現在、新人2名と移籍選手1名を加えて選手は13名とやや少ないが、Wリーグでは保有する選手の数を1チーム15名以内と決めているので、他のチームと比べて極端に少ないわけではない。

林ヘッドコーチについて

ゲーム中「大きな声で怒っているように見受けられる」がと水を向けると、練習中から基本的なことや細かいプレーについても丁寧に徹底して教えていただいているので、全く気にならない。むしろゲーム中に興奮状態の選手が、1分という短いタイムアウトの時間内で、約束事であるプレーの理解を求められ、ハッとすることが多いという。選手にとって、ヘッドコーチとのコミュニケーションは日常から良くできてい



練習も熱心に教える林コーチ

て、コーチが言いたいことを、選手がいかに正確に理解するかが大切で、信頼関係はバツチリだという。ゲーム中の大きな声は「ヘッドコーチと選手とのコミュニケーションを図る一手段なんですよ」と彼女たちは笑っていた。

そういえば取材で訪れたときも、コート上でオフェンスのポジション取りについて、何回も繰り返し丁寧に教えていた姿が印象的だった。

客室乗務員として

厳しい練習に明け暮れる中でも、シーズンオフには客室乗務員として航空機に乗務しなければならない。リーグ戦シーズン中は乗務から外れるよう配慮されているが、それでも6ヶ月間乗務しないと客室乗務員としての資格が失われてしまう。それゆえシーズンに入る直前とシーズンの合間、シーズン終了直後は必ず乗務する。



乗務は国内線だが日本全国のどの路線を担当するかはその都度変わるといふ。バスケットボール部の客室乗務員は6人なので、大体2人1組でクルーを組んでどこかの路線を往復フライトするが、たとえば沖縄線の往復だと、まる1日かかってしまうという。

乗務する場合は、航空機の出発時間の約2時間前に出社集合、ミーティングを終えてから乗務につくので、朝早い便のときは大変だがその分早めに乗務が終わるので、

羽田に帰って乗務を終えた後、体育館へ出向いて練習をやってから寮へ帰るときもある。

それに客室乗務員として乗務するには、普段からマニュアルにしたがって勉強しておかなければならない。たとえば季節によってお客様へのサービス内容も変わるし、乗務する航空機の機種によって非常口の位置やドアの扱い方も異なるからだ。

もっとも大切なことは、乗っていただくお客様の生命を預かるという使命感で、万が一のときどういう行動をとり、その飛行機の脱出装置なども含めてすべて頭に入れておかなければならない。

また、空港内での歩き方ひとつをとっても、常に周りから見られているという意識を持ち、日本航空の看板を背負っているという緊張感を持続しなければならない。よく「乗務のときはバスケットボールをやっているときとは別人の顔だね」と言われるそうだ。

飛行中はお客様へのサービスが主な仕事になるが、悪天候の場合などは機体が揺れることもあり、そんな時バスケットボールで鍛えた足腰が思わず役に立つこともある。

また乗務の際に、お客様が「テレビで見ました」と顔を覚えてくれていて「バスケットボールの選手ですね、がんばってください」と声をかけ応援してくれることはとても励みになるそうである。

客室乗務員への道のり

女性職業の憧れとなっている客室乗務員も、希望すれば簡単に手が届くわけではない。3ヶ月以上にわたる訓練を終えたあと、資格試験に合格しなければ乗務できないが、この訓練が大変なのである。毎日午前9時から午後5時まで訓練センターで多彩な訓練メニュー

一をこなす。お客様の安全にかかわる事柄はもとより、語学、歩き方や姿勢、座り方、お辞儀の角度にいたるまでびっしり。

そのなかでも非常救難訓練はバスケットボール選手の特性を生かせることが多いという。脱出訓練時に地上から高いところに位置する非常口からラフト（滑り台のような非常時脱出装置）で飛び降りたり、すばやく行動したりということは簡単だそうだが、救命器具が飛行機のどこにどのように設置され、非常時にどう取り扱うかをすべて覚えるのはかなり難しいという。スポーツ選手ゆえか、どちらかといえば実地訓練で器具を操作している方が楽しいらしい。

そのような訓練をこなした彼女たちは、客室乗務員の資格と共に保安要員としての役割も担っているわけだが、選手である以上訓練中であっても練習をさぼるわけにはいかない。朝は5時30分に起きてみんなと一緒にランニングを行ってから、訓練センターへ向かい、夕方終了後は体育館へ行って夜9時ごろまで練習に参加してから寮へ帰り再び勉強が始まる。帰ってからその日の復習と次の日の予習をしないと、他の同期訓練生集団から落ちこぼれてしまうからだ。

とりわけ矢代選手は全日本代表にも選ばれて強化合宿をやっていた時期だったので、訓練と全日本の練習とチームと、三つのポジションをこなしたという。

訓練中はそんな日常だから寝不足と疲労が蓄積するのは当然で、自転車に乗っていて居眠りをしてしまい、何かにぶつかって目が覚めたという出来事もあったとか。

これからの道

バスケットボールと客室乗務を両立させている彼女たちに「つらいと思うことはなんですか？」と尋ねた。「厳しい練習」という答えが返ってくるかと予想していたが、答えは「勉強すること」だった。

たとえ少ない機会であっても客室乗務員として勤務する以上は、十分に勉強しておかないと務まらないという。学生時代のテスト準備ではないが一夜漬けはだめだそうで、今でも乗務予定日のはるか前から乗務マニュアルの勉強が必要だ。

そんな彼女たちに「女性として憧れる職業につき、バスケットボールでもWリーグという国内最高峰の位置にいることに誇りを持っていいのでは」と声をかけると、「現在の生活環境でバスケットボールと業務をこなしているのも、こういう日常が当たり前でむしろ恵まれた環境にいると思っています。」ということと「今のチームにおいて、中途半端な気持ちでバスケットボールに取り組んだらダメで、厳しさを真剣になって乗り越えることが大事なことです。」ときっぱりした答が返ってきた。

一方でバスケットボールに対する情熱は熱く、もっともっと発展してマスコミにも多く取り上げてもらえるようになることを期待していると目を輝かせて語っていた。

私たちが日本におけるバスケットボールのメジャー化を図り、男女とも代表チームが常にオリンピックに出場できるよう、後押しをしたいものである

昨シーズンをもって引退した藪内選手たちは、すでに他の客室乗務員と同様のスケジュールで日本全国を飛び廻っているという。

どこかの路線で、もしバスケットボール選手だった客室乗務員に出会ったら、是非とも「ご苦労様でした」の一言をかけてあげていただきたいと思う。

日本航空チームの選手が、厳しい試練を乗り越えて、今シーズンも素晴らしい成績を残してくれることを願う。

molten[®]
For the real game



For the real game

「プレイヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」

私たちモルテン・ブランドは、この信念をもとに

世界に類のないボールと

スポーツエキップメント・メーカーとして

つねに完璧な製品づくりを目指しています。

本大会唯一の公式試合球

BGL7
GL7 国際公認球 | 検定球
貼り・天然皮革、7号球



www.molten.co.jp

株式会社 **モルテン** 東京本社 〒130-0003 東京都墨田区横川15丁目5-7

DUPER®



WE ARE A SPECIALIST IN BASKETBALL GOODS.

DUPER FIVE CO., LTD.
3-5, TATEKAWA 3-CHOME, SUMIDA-KU, TOKYO 130-0023 JAPAN
TEL. TOKYO 03(3632)7045 FAX. TOKYO 03(3632)8327
URL: <http://www.duper.co.jp> E-mail: info@duper.co.jp

●2006—2007デューパーNEWカタログをご希望の方は、住所、氏名、年齢、TEL、職業を明記し、切手390円を同封の上、上記住所までお申込み下さい。